

やっといいで舞う喜び

三年ぶりに有観客で二十六日開幕した全国最大規模の踊りの祭典「にっぽんど真ん中祭り(どまつり、中日新聞社共催)」。名古屋・栄の久屋大通公園をメインステージに市内九会場で開催され、百六十チームが出場する。学生チームも多く、コロナ禍の影響で青春の一部を奪われた鬱憤を晴らすかのように、力強く舞っている。

(森本尚平)

どまつり3年ぶり有観客 名古屋



愛知県内の大学生でつくる「名古屋学生チーム『鯨』」は第一回から毎年出場を続ける。ただ、二〇二〇、二一年はオンライン開催となったため、今年のチームの中心を担う三年生は有観客での出場は初めて。代表を務める日本福祉大三年の大岩陽汰さん(三三)は「お客さんからどう見られるかを意識して踊りの構成や振り付けを考えた」と話す。

コロナ禍のため、各大学への勧誘活動ができずメンバーを集めるのに苦労。一九年に百三十人いたメンバーは六十人に減った。それでも、有観客での開催を知る四年生の支えを受け、

学生チーム「情熱呼び覚ます」

準備を進めてきた。前代表の愛知教育大四年、は「鯨に入ってから初めて踊りをするメンバーは多い。技術面では劣っても学生らしい前のめりの気持ちで、百点満点の踊りを見せてほしい」と見守る。祭りで、中心となって企画運営を担う学生委員会九人もほとんどが有観客開催の祭りを知らない。代表の金城学院大三年、は「分からないことだらけで、開催直前まで自分たちで運営していけるのか不安だった。名古屋の夏を盛り上げるために頑張りたい」と意気込む。

二十六日の前夜祭で踊りを披露した鯨のメンバーたち。素早く衣装を変えたり、大きな旗を豪快に振り回したりして演出でも観客を楽しませた。チームのスローガンは「眠っている情熱を呼び覚ませ」。観客に手拍子を求め、会場を盛り上げた大岩さんは「お客さんを巻き込むような踊りをして、お客さんたちの祭りへの思いも呼び覚ましたい」。三年分の情熱を燃やし、二十八日まで踊り続ける。